

ハーン先生の熊本

Alan Rosen

ラファディオ・ハーンが第五等学校の外国人教師として熊本に来たのは、1891年でした。島根県の松江市から来ました。松江では彼の今までの人生の中で一番幸せな一年間を過ごしたと言えるでしょう。すべては新鮮で魅力的で珍しくて夢の世界。古いお寺やおもしろい習慣、下駄の音、要するに昔の日本でいっぱいでした。天気と寒さだけが気に入りませんでした、それを避けるために暖かい熊本に引っ越しました。

熊本は松江に比べれば暖かかったのですが町の外見に一目でがっかりしました。西南戦争のせいで熊本城も、たくさんの屋敷や店や寺も焼けてしまいましたので、松江に比べれば殺風景に見えました。それに「ここでは、もちろん湖がないから宍道湖みたいな美しい風景はない。しかし天気のいい日は大きな火山阿蘇山からけむりが上がるのが見えます。」また鶴屋百貨店の隣の土地(現在富士銀行)にあった家を借りましたが庭が狭くて家賃が高かったです。なんと月に十一円でした(松江の家のほぼ三倍!)。ハーンによると熊本は「モダンすぎる」。そして「大きすぎるし半分西洋化され、軍人だらけの醜い駐屯地だ」と友達への手紙に書きました。

ハーンが熊本に来て一番恋しかったのは松江の日本らしさでした。「熊本には檜の神棚を売っている店がないし、玄関先にしめなわを飾っている家など見たこともない。」そしてまた、「美しい漆物とか焼き物とか銅器がない。芸術(絵)もない、掛け物もない、骨董屋もない。」実際にはもちろんありましたがハーンは見つけなかったのでしょうか。

しかし熊本の自然はすきでした。阿蘇山が印象的でしたがハーンは国内旅券がないかぎり阿蘇山まで行けませんでした。龍田山からのすばらしい眺めも作品に描かれています、水前寺公園は人工的で不自然だと思いました。熊本には松江では見かけなかった動物もいました。それはヤギでした。妻のセツはガチョウとブタも珍しがっていました。特産品では熊本の絹が美しくて安価なのでセツのためにたくさん買いました。

ハーンは熊本にはおいしいパンや肉や酒が豊富にあるので喜びました。そのお陰で熊本に来て間もなく体重も増え丈夫になりました。健康でなければ良いものは書けないと常々言っているハーンにとって、健康はなによりも大切なことでした。

気候に関しては、冬は「我慢できないほど寒い」けれど、7月と8月の暑さは大好きでした。地中海の小島に生まれた彼には夏の蒸し暑さが合っていたようです。

結局ハーンは熊本が嫌いだったというよりは、大きな都市や近代化を嫌っていたのです。彼は滞在したことがあるシンシナティ、ニューオリンズ、ニューヨークなどの大都市はみな気に入らなくなってしまいました。東京や金沢みたいな大都市に比べれば熊本はまだましだとハーンが言っていました。たしかに熊本はハーンの好みの街ではありませんでしたが、彼の健康と執筆の面から見れば、熊本から彼が得たものは決して少ないとは言えません。

(アラン ローゼン 教育学部外国人教師)